





ながさき3面 グッドライフ

ぼってん・うーまんの会

メッセージ

女性から世の中を見ると、納得できないことが多いです。昔は女の天皇もいたのに、なぜ今は男だけか、学校ではなぜ男子生徒から先に出席を取るのか、なぜ男と同等に出世できないのかー。ぼってん・うーまんなちは、こんな世の中に怒りをぶつきたいと思っています。

金丸元副総理の発言に



みられるように、政党第一党の体質そのものが、男女差別を容認しているのが現実です。女性のシンクル化も進んでおり、女性を一人の人間として尊重する世の中にするため、忙しく飛び回っています。みなさん、家の中に閉じこもっていいので、外に出ましょう。元気な仲間を待っています。

(ぼってん・うーまんの会連絡係 津田尚美さん)

ぼってん・うーまんの  
会員は元気はつらつ

「女たちは天皇制が嫌いだ」「男子だけに皇位継承権があるのはおかしい」——会員の



一人が発起人となって、二月二十四日(大喪の礼)に長崎市内で開催した「天皇制を語ろうー女の井戸端会議」で、天皇制への不満が出るわ出るわ。もともと、女性の視点で天皇制を語り合おうと開いた会だったが、参加百五十人が主婦中心となり、組織から

許さないわよ 「男女差別」

性の自立を考えるのが、会の設立趣旨で、今年のモットーは「差別は目につき次第、告発する」。一月末に、金丸信・元副総理が、長崎市であった参院選決起大会で、「サッチャー(英首相)は男性を知っている、おだんがある。土井さん(社会党委員長)にはおだんがねえじゃねえか、男を知らん」と発言したことに猛反発。「これは女性蔑視(べっし)の発言で、結婚しない女性に対する差別発言だ」として、自民党県本部などに抗議した。

会が続けてきた大仕事の一つが「女のノート3年」の発行。「女性も目標や計画を持つて生きよ」と三年分の日記帳を作った。今年、四冊目を四千部(二冊千二百部)発行したが、ほぼ完売した。その益金で、毎回長崎市立中央公民館図書室に寄贈している「ぼってん・うーまん文庫」も七百冊を超えた。

「はみ出して」独自の活動をするようになった。現在、会員は主婦、教師、OLなど三十人。月一回の例会では「黙っていたら損」という感じで、口をはさむのが難しく、話の途切れ目がない。

男女差別の撤廃を求め、女

「ぼってん・うーまんの会連絡係 津田尚美さん」095(24)507611へ連絡を。

# 「土井さんにはお旦那がねえじゃねえか」

## 金丸元副総理の女性差別発言に ぼってん・うーまん激怒

### 「抗議声明」で世論に訴え

た社会党を「権を欲んだよう  
 なやり方では政治にならん」と批判したまでは良かったが、話はそこで収まらず、サッチャー英首相を引き合いに出し、冒頭のような発言が飛び出した。  
 本人は、笑い話として皮肉ったつもりだった。しかし、言いたい放題のこの発言に猛烈と反発したのが、長崎市内の女性グループ「ぼってん・うーまんの会」。これは女性蔑視(べっし)の発言で、結婚しない女性に対する差別発言だと、自民党長崎県連、金丸元副総理の自宅に抗議文を送り付けた。

抗議文は、こんな内容だった。  
 「女子差別撤廃条約に批准した国の元副総理の発言としては許されないものであり(略)このような発言が、笑い話の中になされ、それが公的な場で紹介されるといふことは、自民党の体質そのものが、男女差別を容認していることを暴露しているようなもので、それが政党第一党であるだけに、私たちは大変なショックと憤りを覚えています。これからの時代は、女性のシングル化がますます進みます。この会」についての説明を一人ひとりと認識して、配偶者がいようといまいと、女性を一人の人間として尊重することを要望します」

「サッチャー(英首相)は男性を知っている。お旦那(旦那)がある。土井さん(社会党委員長)にはお旦那がねえじゃねえか、男を知らん」  
 すべては、この発言から始まった。今年一月末、長崎市内で開かれた自民党の参院選決起大会のこと。講演した金丸信・元副総理が、先の税制国会で「生歩戦術」をとっ



男女差別と闘い続ける「ぼってん・うーまん」たち

男女差別の撤廃を求め、女性の自立を考えようと、福岡有職婦人の会の呼びかけでできたが、その後メンバーが主婦中心となり、現在は独自に活動している。連絡先の津田尚美さん(四七)をはじめ、主婦、教師、会社員など会員は二十人。  
 ぼってん・うーまんの怒りは、抗議文を送っただけでは収まらなかった。「どうせ返事はなしのつぶてに決まっている」(津田さん)と考えて、抗議したこと知らざる声明文を、女性問題評論家からAP、ロイター通信をはじめとするマスコミ関係など、思いつゝ限り六十通近くを送った。  
 その反応は予想以上に大きかった。津田さんの家の留守番電話には、長崎市内の女性などから「頑張ってください」と激励が数件、大阪からも賛同する封書が届き、東京の市川房枝記念館などからも問い合わせが来た。  
 同会はこれまで、抗議活動というより、講演会や勉強会の開催が主だった。しかし、昨年、地元のある建設会社のコマーシャルが会員の意識を「変えた。のどかな家庭風景の中で、男の子は「僕スポーツ選手になりたい」と話すが、女の子は「私、お嬢さん」。「なんで女は、いまだに、お嬢さん、なのか」(二十三歳で女の人生を終わらせる気か)と怒りは爆発。「女も男と同等に職業を持つべきです。変な価値観を植え付けては困る」と抗議して、内容を変更させた。そして、今年のもっとを「差別は目につき次第告発する」と決めたところへ飛び込んだのが金丸発言だった。  
 「世の中には納得できないことが多い」と津田さんは言う。「なぜ女は天皇になれないのか、学校ではなぜ男子から出欠を取るのか、なぜ男と同等に出世できないのか」。会では、二月二十四日(大喪の礼)に開催して好評だった「天皇制を語ろう」女の井戸端会議の第二弾を四月二十九日に開催する予定もある。  
 「もし生まれ変わっても、また女に生まれたい」と思える世の中にしよう。ぼってん・うーまん。たちの闘いは続く。  
 (長崎総局・加茂川記者)

長崎女性問題研究会「ばってん・うーまんの会」が金丸元副総理と自民党長崎県連に郵送した抗議と要望のアピール文が、会から届いた。

記憶に新しいニュース、といっても、口角泡を飛ばして天下国家を論じることをしては、「女・子ども」をサブヒューマンとする人々には、例によってジョークのネタでしかないかもしれない。問題はまさにそこにあるのだ

# メディア時評 ● 落合 恵子

ことの起りは一月二五日、長崎で開かれた自民党の集会、この夏に行われる参院選の立候補者を支援する決起大会(なんとも時代がかった気恥ずかしい言葉だが、メインストリームもそれに反対する側もよく使っている)でのこと。

金丸元副総理が、社会党の土井たか子委員長とイギリス。サッチャー首相を比較して、次のような主旨の発言をした。「サッチャーは男性を知って

る、おだんがある、土井さんにはおだんがねえじゃねえか、男は知らん、と笑い話になった」云々(一月二六日付「朝日新聞」)。少し長い引用になるが、この発言に対する「ばってん・うーまんの会」の抗議文を紹介しよう。

「……これは女性差別の発言であり、結婚しない女性に対する差別発言です。私達、ばってん・うーまんの会」は、この発言に抗議します。なぜなら女子差別撤廃条約に批准した国の元副総理の発言

## 同根の病

「体質」は、政党第一党である自民党に限らない。それどころか、社会全般、残念ながらメディアの中にも、さらに残念なことに、同性の中にも時としてあるバイアスであるだろう。

女性は演説の内容ではなくネクタイの柄を見ることが多いという、中曽根前総理のネクタイの柄発言も、渡辺政調会長の黒人は経済観念が乏しいという、アッケラカのカー発言も、同根の病から発する体質であり症状であるだろう。

中国、国営新華社通信が報じている「日本の侵略戦争発動を竹下首相再び否認」のニュースも、また。

もつとも、こういった差別意識の持ち主や、そのグルビーにあって、差別発言はあくまでもちよつとした「失言」であり、彼らにとって失言とは、たまたま運悪くおおよけになってしまった反省も熟考の余地もない、ゆるぎない「本音」でしかないのかもしれない。

運が悪かった、壁に耳あり障子に目あり、ま、こういうご時世だからお互いちょっと気をつけましょうや、ご同輩、ガハハハ程度

する女性たちは、「おだんがねえじゃねえか、男を知らんのでは(笑い)」と、なるのだろうナ、と少し意地の悪い想像もしたくなる。その体質、それ自体を、彼女たちが抗議しているにもかかわらず。

さきのネクタイ発言等にして、海の内こうで抗議の声があがつてから、ようやくこの国でもという現状を考えると、報道する側の何割かもまた、同じ体質だと言わざるを得ないのだが、このテの同根の病には、「お大事に」とは言えないナ。

朝日ジャーナル 1989.3.10

上記の記事は、今「朝日ジャーナル」に連載されている落合恵子さんの「メディア時評」の3月10日付のもの。私達が出した素朴な抗議があらわに取り上げられるのは力強くうれし。そして、声上げつづけてゆく大切だと、いひいひ感じています。